

作者・筆者からのメッセージ

今回の教科書には、新たにたくさんの方の教材が掲載されました。そのなかから三つの教材をピックアップし、作者・筆者が作品にこめる思いをうかがいます。

「ゆうだち」(二年上)



もりやま みやこ
森山 京

東京都生まれ。童話作家。一九九六年『まねやのオイラ旅なご道中』(講談社)で野間児童文芸賞、二〇〇九年『ハナと子屋のなかつたち』(理鈴社)で赤い鳥文学賞など、数々の受賞歴をもつ。光村図書国語教科書「黄色いバケツ」(二上)の作者でもある。

ゆうだち

それが、きゆうに まつくらに なりました。
ひやりと した かぜが ふき、
ぼたぼたと あめが おちて きました。
「ゆうだちだ。」
くさはらに いた うさぎの こは、
おいそぎで、木の したに かけこみました。

おはなしを たのしもう

そこへ、
「ひゃあ、ずぶぬれだ。」
しぶきを ちらしながら、
たぬきの こが、とびこんで きました。
「やあ。」
と いいかけて、うさぎの こは、
あわてて 口を おさえました。
たぬきの こも、
うさぎの こに きが つくと、
ぶいと よこを むきました。



93

けんかしていたうさぎの子とたぬきの子が、雨宿りをきっかけに仲直りするという、心温まる作品。挿絵は人気イラストレーター・100% ORANGE によるもの。



小さなお話 大きなひろがり

夏の午後、草原で遊んでいたうさぎの子は、とつぜんの夕立に、あわてて近くの木かげへ逃げこみます。前後して友だちのたぬきの子もとびこんできますが、あいにく二ひきは、きのうけんか別れをしたばかり。たがいに距離をおいて立ち、そっぽを向いての雨宿りになります。

雨はどしゃ降りになり、頭の上で雷がとどろくにおよんで、二ひきは生きた心地もしません。たおれるように地面に臥

せ、どちらからともなくぴたり寄り添ってしまいます。やがて雨が上がると、二ひきは手に手をとって、木かげから駆けだして行きました。というのが「ゆうだち」のあらすじです。

些細なことから始まったけんか。双方とも仲なおりをしたい気持ちはあるものの、和解のきっかけがつかめないでいます。ひとこと「ごめんなさい」と言えば済むものを、どちらも頭を下げたくなくて、意地の張り合いが続いています。子どもならずとも、大人同士にも日常ままあるいさかいの光景です。

そんな矢先、雨宿りの木の下で偶然鉢合わせをしてしまった二ひき。逃げもかくれもできない、のつぴきならない状況下で、なんとも気まずいだんまりの場面となりますが……。豪雨と雷という恐怖の連続体験が、幼い心をびったり結びつけました。終わり近く、からりと晴れ上がった空の下へ、嬉々として走り出すうさぎの子とたぬきの子。その姿に読者である子どもたちも、ほっと胸をなでおろすことでしょう。

日本の夏に多い激しい降雨や、耳をつんざくような落雷の響きは、たんにお話の中のできごとではありません。このうさぎの子やたぬきの子と似たような場面に、すでに身をもって出くわしている子どももいるでしょう。あるいはテレビの画面などで、自然の脅威や災害の凄まじさを目に焼きつけた子どももいるはず。いずれにせよ、子どもたちにとっては身近な事柄であるだけに、この一文に対しても強い関心と興味を寄せてくれると思います。

さらにここで考えてみたいのは、友だちの存在です。うさぎの子は木の下へ避難しますが、もしその場所へたぬきの子が現れなかったら、あとの話の展開はまったく違ったものになるでしょう。うさぎの子は一人ぼっちの心細さに耐えられなくて、泣いたり、ふるえたり、あるいは雨中にとびだして行ったのかもしれない。うさぎの子もたぬきの子も、そばに友だちがいてくれたから救われたということ、

ところで、このお話の終章は、「ゆうひが かつと てりつけ、せみの こえが きこえて きました」という一行でしめくくられています。四百字詰原稿用紙二枚におさまるほどの、小さなドラマの幕切れです。一見あってもなくてもいいような文章に見られるかもしれませんが。ここには、きらきらまばゆい夕日と、いつせいに鳴きだした蟬の声。低学年の子どもでも容易に想像できるような、鮮烈な夏の色、光、そして音がこめられています。

作者があえてこの一行を書き添えたのは、日本の夏の季節感や自然の光景を、やさしい日本語を通して、ぼつちりとでも味わってもらえたらと思うからです。八百字ほどの短いお話ですが、幼い人の目と心に何かを残せたらと作者は願っています。

「海をかつとばせ」(三年上)

やましたはるお
山下 明生

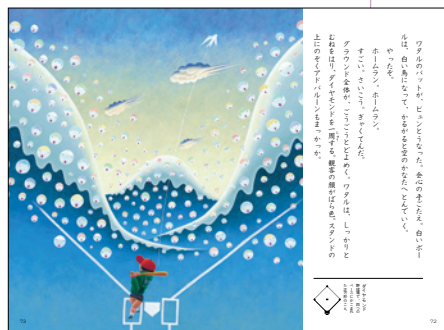
東京都生まれ。児童文学作家。「一九七五年『はんぶんちやうだい』(小学館)で小学館文学賞、八六年『海(うみ)のモリ』(理論社)で赤い鳥文学賞など、数々の受賞歴をもつ。海を題材とした作品が多い。

海をかつとばせ

山下 明生 作
杉浦 範茂 絵

ワタルは、今年から野球チームに入った。今はまだベンチせんもんだが、夏の大会までには、なんとかしあいにしたいと思っている。ピンチヒッターでもいいから、なんとか出たい。
ワタルは、ひみつのとっくんをすることにきめた。「毎朝、海辺までランニングして、はまべて百回すぶりをしよう」。
さいしょの日、ワタルは、バットをつかんでうちをとお出した。風の強い朝だった。走り始めると、耳元でかみの毛がヒュルヒュルと鳴った。

4 読んで、考えたことを発表しよう
どんな人物が登場するでしょう。
人物の会話や行動、気持ちに着目して読みましょう。



野球の試合に出られないワタルは、浜辺で素振りをするという秘密の特訓を始める。ワタルがバットを振っていると、白い帽子に青い服を着た男の子があらわれ、練習を手伝ってくれると言う。すると、真っ白いボールが波の後ろから次々と飛んできて……。少年と海を描くファンタジー作品。杉浦範茂氏の挿絵が、作品をより鮮やかに彩る。

波に魅せられて

大好きな俳人・山口誓子に、
星恋ひのまたひととせのはじめの夜
という一句があります。それになぞらえれば私は、海恋ひのまたひととせの：というところでしょう。

高校を卒業して京都の大学にはいるまで、ずっと私は、瀬戸内海の島で暮らしました。一日たりとも、海を見ない日はありませんでした。そのせいか、島を離れると余計に海が恋しくなりました。寄せては返す海の波を見ていると、時の経つのを忘れます。何億年とつづく自然の無償の営みに、胸が熱くなるのです。

小学校時代は、先生のお話もそっちのけで、瀬戸内海を往来する船を眺めている子どもでした。遠ざかる船にさそわれ心がトリップして、ついつい空想の世界に迷い込むことがしばしばでした。

学校を出て出版社にはいると、仲間を

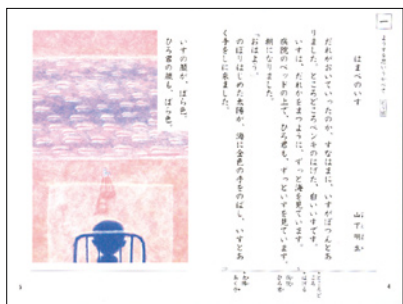
さそってヨットを持ち、「てふてふ」号と名づけました。ヨットからの視線は水面すれすれで、波の高い日は、水平線がざざざざとがって見えます。その情景をふくらませたのが、『うみぼうやと月うさぎ』というお話です。

こうした海とのつきあいから、『カモメがくれた三かくの海』が生まれ、『はまべのいす』(※)が生まれ、『ヨットと花びら』が生まれ、『風の強い日』が生まれ、それぞれ国語教科書にも採択されました。海はまさに、私のお話づくりの先生です。

なかでも、いちばん海に親しんだのは、横浜から三浦半島に越してからの三十年間でした。ちようどダックスフントを飼いはじめたところで、犬といっしょに早朝の浜辺を散歩するのが日課でした。朝一番に浜において、犬と並んでまっさらな砂浜をあるく爽快さは、今も忘れられません。少年時代から、早起きしてバットの素振りをしていました。試合ではベンチウォーマーでしたが、ピンチヒッターでホームランを打つ場面をいつも夢見ていました。そのくせがぬけず、大人になって朝の散歩に出るときも、バットをかか

えていききました。

波というのは、浜にかけあがる寸前にきゆうに高まります。そのうねりのひとつひとつをかぞえながら、海に向かってバットを振るのです。潮風としぶきを顔に受けながらつづけていると、波のうしろからひよいひよいと手がのびて、白球を投げてよこすような幻覚におそわれます。波の子どもの叫び声も聞こえてきます。波に命を感じるのには、そんなときです。私の育った島では、沖の白波を白い馬に見たてていました。船で釣りをしているとときなど、白波が立ち始めると、「白馬が飛びだしたけん、はあ帰ろうで」などというのです。私の『海のしろうま』は、



※「はまべのいす」
昭和61～平成3年度版 国語三年上
浜辺におかれたいすを病室から眺める少年。一日の海の表情と、浜辺にやってくる人々が、少年の目に生き生きと映る。(『光村ライブラリー第6巻』所収)

そんな思い出が書かせてくれた一冊です。外国でも白波のことを、ホワイトキャップとかホワイトホースと表現しているのを辞書で見つけて、うれしくなったものでした。それ以後私は、「うさぎのシッポ波」とか「ひよこの行列波」とか「鯨のジャンプ波」とか、勝手に名前をつけて、イメージを駆り立てるようになりました。海が飽きないのは、時々刻々の波の表情が変わるせいです。さざ波から三角波から台風の怒涛まで、どんな波も私は好きです。いろんな波に魅せられて、わざわざハワイや南極まで出かけたこともあります。いい海、いい波に出会ったと、その感動をひとりですまっておくのが、申しわけない気持ちになります。せめて作品に取り込み、読者と感動を分かち合いたいと願うのです。こんどの『海をかつとばせ』も、朝焼けの浜辺で、波の子どもに合った感激を、自分の子ども時代と重ねながら、こんなお話に仕立てました。

孤高の俳人・尾崎放哉に、
こんな好い月を一人で見て寝る
という名句がありますが、私の場合、こんな好い海をひとりで見えて……という気分。そんな至福のひとつきを、絵本では杉浦範茂画伯が、見事に表現してくれています。

「生き物は円柱形」
(五年)



本川達雄

宮城眞生まれ。東京工業大学教授。生物学者。専門はナマコやウニやヒトデなどの、海の動物について。主な著書に『サンゴ礁の生物たち』『ゾウの時間ネズミの時間』（以上、中央公論社）など。

生き物は円柱形

本川 達雄 文
平田 利之 絵

地球上には、いくつもの、さまざまなる生物がいる。生き物の、最も生物らしいところからは、多様だということになるだろう。しかし、よく見ると、その中に共通性がある。形は違ふての分がけやすい通性は、「生き物四柱形」という点だ。君の指を覚えてこらん。丸くて、すぐけのびな形だろう。こつこつといたりでこぼこがあつたりしていても、それをこぼこは四柱形と見なすことにしよう。このように見えるとうても、あゝも、首が四柱形だ、胴体もほほは四柱形といえる。「氣をこぼす」の姿勢が四柱形は、体全体が四柱形だと見るともできる。

「氣をこぼす」ミミズや芋は、体全体が四柱形だと見るともできる。ネギやイヌのあしや胴体も、丸くて長い、つまり四柱形。植物だと四柱形。木の幹や枝、草のくきは四柱形。四柱形が集まつて、全体が作られている。



○枝エダ ○幹ミナ

40

地球上にいるさまざまな生き物は、形のうえでわかりやすい
共通性がある。それは「円柱形」であるということ。なぜ、
生き物は円柱形なのか、その謎をわかりやすく説明した文章。
今回、教科書のために『生き物は円柱形』（日本放送出版協会）
を、子どもたち向けに書き下ろした。



これは生物学に関する文章である。生物学は科学（理科）の一分野。理科の特徴は共通性の追求にある。

自然は一見多様だが、よく見て考えていくと、共通性が浮かび上がってくる。これまでに一八〇万種しゅもの生物が記載されており、種は形で分類するのが基本。

つまりそれほど生物の形も多様なのである。それでも共通性が発見できるのだ。

ただし共通性を見いだすには、それなりの近似をしなければならぬ。私たちの指はほぼ円柱形と言えるけれど、実際には関節の部分はふくれていて、きちんとした円柱形とは言い難い。魚は前後がスリムな円柱形だと本文中では言っているが、これはずいぶんと強引な議論である。実際の自然界には、真に円柱形の生物などいないのであって、そこを、片目をつぶって「いい加減に」見ていくと、皆、円柱形に見えてくるのである。

物理学や化学では、理想状態というモデルを考える。これは現実の自然界には存在しない「理想」のもの。科学は自然そのものではなく、自然の近似（モデル）をつくり上げていくのである。科学は厳密な学問だと思っている人が多いが、じつは、いいかげんに自然を眺めるからこそ科学が成り立つのである。詳細に観察し、その結果をちよつといい加減に大きくとらえてモデル化し、そのモデルを厳密に取り扱っていくのが科学のやり方。スタート地点がいい加減だから、その後の処理はきわめて厳密・厳格に行うのが科学なのである。この文章は科学のから

くりと、そのものつ怪しさとおもしろさを感じられるように書いた。

この文章は理科の中でも生物を扱っている。生物学は物理や化学とは、ちよつと違う。

子どもたちは、「どうして?」「なんで?」「なぜ?」を連発するものだ。知的興味の発露がこの「なぜ?」である。ところが物理も化学も「なぜ?」には答えない。

「なぜ物は下に落ちるの？」

「万有引力があるからさ。」

「なぜ万有引力があるの？」

「なぜだか知らないけどあるんだよ。」

「なぜ？ つ？？？？」
落ちると何かいい

「ことがあるの？」

「落ちることに意味などないし、わかんないものはわかんないのっ！でもね、どんなふうに力がかかって、どんなふうに落ちて行くかはわかる。それを教えてあげよう。力は質量に比例して距離の二乗に反比例するんだ。数式できっちり書き表せるんだよ。だから算数を勉強しないとね。」

物理学では「なぜ why?」という問いには答えない。なぜかは神様がそうし